



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.105

2012.6.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

25

「学友 塚田光さん マコ・ミクロリス・考古学手帖」

考古学講座同年生で最も親しくなったのが塚田さん。戦時中高崎に疎開し尾崎喜佐雄先生に考古学を学んだ。私と同じ昭和9年3月生まれということで互いに親しみを持った。実家は早稲田鶴巻町の鶴巻公園に接した小さな印刷屋さんでした。塚田君の家を訪ねたのは28年2月1日が最初でした。夜遅くまで考古学や其の他の話をした。私としては珍しい位に存分に話した。彼がいうには、私は元気があって朗らかで研究熱心だ。と。本当かと自分自身に聞きたいと日記に書いている。友達ととことんまで話が出来た。私を友達と認めてくれる、褒めてくれた。それが本当に嬉しく、下宿から近いこともあってよく訪ねた。塚田君と話すことも目的でしたが、家族の暖かい雰囲気とお母さんの夕飯をご馳走になるのも、特に月末のお金が無いときは目的の一つでした。

土器の器形実測という小林行雄先生の考案した竹ヒゴを使ったマコがあった。模型飛行機用のヒゴを買って長さを揃え、巾3cmほどの薄板にすれない様に羅紗布を張って挟んで作った。が思うように器形が取れなかった。塚田君は活字印刷で版に活字を組むときに使う薄板を巾7mmほどに切って、厚さ5mmほどの巾3cmほどの板にきっちりと挟むと上下にすれなく、土器の器形が正確に取る画期的なマコを作った。このマコは皆に広まり私は大小の二つを完形土器・破片と使い分けた。使用する機会も無くなった今も大事に所蔵している。

明大考古学研究会で自分たちの機関誌がほしくなり、ガリ刷冊子『ミクロリス』を27年から刊行した。

不定期刊行で卒業までの4年間に13号まで出した。塚田君は印刷屋さんだからと編集にかかわり私も手伝った。自由な内容で書けたので私は何回も書いた。「考古学雑片想」と題しての文は良くも悪くも批判があった。冊子の配布は学内の会員のみとなっていたが、学外からの要望もあって配布した。これが問題になり杉原先生からだめと言われるが、こっそり配布した。当時の学徒の思いのこもった冊子だ。

塚田君とは個人的にいくつか調査している。横浜市末吉中学校校庭造成中の発掘は同級生鷗木晶君の誘いで、黒土層中の住居址確認が勉強になった。鷗木君の師石野瑛先生が陣中見舞いにきてくれた。愛知大学芳賀陽さんが私を訪ねて上京したとき、塚田君と高橋良治さんを訪ね貝塚を調査した。縄文前期住居址を調査したいというので、夏目一平さんが久永春男先生指導の愛知県津具村鞍舟遺跡の調査に共に参加した。塚田君の卒論テーマになった。

卒業してからも往来があり、下伊那では天竜峡に、木曾では寝覚ノ床に遊んだ。一人住まいの下宿でどんな接待をしたのかと思う。長野県考古学会第一回大会は富士見の井戸尻考古館で持ったとき塚田君は高橋さんと参加してくれ、中期土器に話からはずんだ。

塚田君が卒論調査で尖石遺跡の資料を調べ、そのとき炉体に使われていた『平出Ⅲ類土器』に注目し発表した。日義中学のクラブ員生徒が採集した土器がこの土器で、私は木曾の同類土器を纏めた。完形土器を求めて採集した遺跡を調査するが土器の発見はなかったが、思わぬ押型文の立野式土器を検出することが出来た。

昭和33年(1958) 塚田君が中心になって『考古学手帖』が刊行された。塚田君の考古学研究の現状を憂い、若い研究者が考えを発表する場としての機関誌でした。全国の研究者の渴望する冊子で、新考古学として学界高く評価された。私も同人の一人になった。

塚田君の考古学実践は昭和37年(1962)からの下総考古学研究会の中期縄文土器追及にみられる。

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。



▲昭和37年(1962)8月 神村(左)、塚田さん(寝覚にて)



▲塚田君考案のマコ

目次

■田舎考古学人回想誌 学友 塚田光さん マコ・ミクロリス・考古学手帖 神村 透 …1
■考古学の履歴書 公務員としての考古学研究者(第4回) 石井則孝 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第98回) 片桐千亜紀 …3
■考古学者の書棚 『常陸国風土記』と説話の研究始社会 早川麗司 …4

考古学の履歴書

公務員としての考古学研究者(第4回)

石井 則孝

《日本考古学協会図書問題に寄せて—その2》

前回、日本考古学協会の図書問題についての問題発生の原点を書かせてもらったが、今日に至るも解決策がないので、この問題の本質をはっきりさせておいた方が得策かと考え、その後の経過と問題点について追加してみたい。

1. 「協会図書問題小委員会」について

1975年以来市川市考古学博物館に収納されていた図書も2000年には満杯となり、その後寄贈された図書は埼玉県の所沢市にある運送会社の倉庫へ有償で預けられるようになった。さらに悪いことに市川博の関係者も退職となり責任上全て協会への返還となった。

そこで困った協会は、図書問題に詳しい会員(堀越正行・高橋一夫・石井則孝・理事として萩原三雄・山岸良二)を小委員会に集めた。協会内に「協会図書対応検討小委員会」が発足していた。小委員会は「施設設備検討小委員会」の名のもとに丸2年間検討会議を重ねてきた。後半は理事の交替があり、新人の白井久美子理事が担当することとなった。

小委員会は、市川博の収納状況、所沢倉庫の堆積状況、さらに年間どの程度の図書が協会へ入ってくるか等々、色々な角度から検討を加えていった。

山岸理事は、千葉県内・都内等の小・中学校の空き教室を懸命に捜し歩いていた。萩原理事は、山梨にある自分の研究所に余裕がないかと。私は、先輩会員の寄付金が4000万円ほどあることを知っていたので、その有効活用はと発言してはいたが……。また、在庫図書を金額に換算するとどのくらいになるかと小宮書店の社長さんに市川博まで来ていただき、査定は350万円くらいかなとの見積もりをいただいた。

その後、協会理事会は、寄贈先等種々の検討課題を整理して小委員会の意見を参考にしながら寄贈先を決定した。

2. セインズベリー寄贈への大失態

ところが、協会図書の海外への寄贈に反対する会員からの申し出により、2010年10月に行われた兵庫大会で臨時総会が開かれ、数十票の差で「反対」が議決された。私は、地方で臨時総会を行えば反対の会員ばかり集まって否決されるに決まっていると協会事務局に云ってはいたがそれが現実となってしまった。

同年11月に開催した日本遺跡学会の大会の際、出席していたNHK解説委員の毛利さんから「先日協会事務局から、図書問題特別委員会を作るから委員に就任してくれ」との連絡を受けたと突然云われ、何も知らされていない小生は啞然とさせられた。

私の手元に、協会の法人化へ尽力された弁護士岡野隆男さんの私宛の書簡がある。将来の組織を作るための参考にもなると考え、岡野さんへお願いはしてあるが活字として残しておくのも重要と考え紹介しておく。『考古学協会の図書問題では、いつぞや岡野へも協力するようにとの貴兄のお言葉にかかわらず、無為を決め込んでしまいました。今になって悔

やんでいます。きょう水村常務と石川理事がお見えになり、このとき始めて、図書寄贈先募集要項を見ました。会報を読んで危惧していたことが、現実となってしまいました。要綱では寄贈先を誰(何処)が決めるのかが規定されていません。そうすると、最終的には総会の議を経なければならないものと考えられます。理事会で決定したからとて、「一時不再理」とはならないでしょう。要綱で理事会なり、会長なりが決定することがあれば、まだよかったです。』前文後文がまだありますがこれは割愛させていただきます。

また、日経・朝日・読売の記事を要約したものが、2010年10月17日付のあらたにすに載っていたのでこれも再録しておく。『英への蔵書寄贈会員投票で否決—日本考古学協会(東京)は16日、臨時総会を開き、自治体などから協会に贈られた蔵書5万6千冊を英国の「セインズベリー日本芸術研究所」に寄贈することに決めた理事会案について再協議し、会員による投票で否決した。臨時総会は兵庫県明石市で開催の協会によると、来春の総会で、第三者による委員会を設置し、対応を決める。理事会は1月に寄贈を決議。3月に同研究所と覚書を交わし、5月の総会で承認したが、一部会員が「蔵書は日本文化を語る国際的財産」などとして海外寄贈に反対。定款が定めた全会員の1割を超える489人の署名が協会に提出され、臨時総会開催が決まった』

考古学関係図書の揃っているのは、大学では東大・九大・明大・早大・国学院等で、研究所では、奈文研・檀考研があげられる。

協会所蔵図書は、現実的にはほとんど利用されてこなかったのが実情である。前回記したように財政危機の協会にとって、将来売れるだろうとの財産意識が存在していた。本来ならば研究団体には財産は必要ない。日本建築史学会・日本美術史学会等、関連する学会を見てもわかるであろう。

3. 識者へ問う

私が千葉県や東京都で美術館・博物館等を5ヶ所ほど造ってきたが、都埋文センターの時は、20年間で5万冊の図書が収納されるであろうとの計算で図書室を設計し、2人の司書を置いて運営してきた。図書は利用されることによって生かされるのであって倉庫のコヤシではない。協会々報の何号だったか、この図書問題について、奈文研の松井章さんが世界的視野に立って書かれたことが強い印象として残っている。

以上色々とし記してきたが、詳しく知りたい方は、協会会報 No.174号に、過去の経過や第一回の協会図書に係る特別委員

略歴

1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

会議事録等6頁にわたってあるので是非読んでもらいたい。小委員会で発言されたものと重複するものがある。

おわりに

小委員会解散の際、協会事務所に全員が集められた。英国まで頭を下げに行った気の毒な白井理事も同席していた。私は、菊池会長へ「小委員会メンバーの全員に謝ってください」と伝えた。その通りにはなったものの須田理事は最後まで無言であった。

こんなにむなしい会議が過去にあったろうか。特別委員会に、関係者であった熊野正也さんが入ると伝えられていたが、彼は

協会をも退会してしまった。仙台の佐々木和博会員が市川博に在籍していたことがあるので、多少の救いではあるが……。

会費無料の恩恵を受けている長老会員が未だ40～50名いると聞いている。一度、これらの大先輩に集まっていたかき協会の将来について話し合っていたいただいてもよろしいのではないだろうか。数千万の寄付をしてもよろしいという大先輩もいるかも知れぬ。

協会図書問題は大きな問題であるので、今後も注視していただきたい。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 98

具志川島遺跡群 ～ 沖縄県伊是名村

片桐 千亜紀

具志川島は沖縄県伊是名村に所在し、沖縄本島の北西洋上に位置する細長い小さな無人島である。面積は47ha、周囲4.2km、南北0.4km、東西1.9km。1970年3月までは小学校を有する有人島であったが、学校の廃校に伴って無人島となった。当時の集落や学校は今では亜熱帯のジャングルの中に埋もれている。この島に存在する遺跡は「具志川島遺跡群」として知られる。島で最も古い人類の痕跡は縄文時代中期に見いだされ、以来、縄文時代、弥生～平安並行時代、グスク時代(中世)を経て近世・近代にいたるまで多くの時期の遺跡が確認されている。

1960年代、初めて親貝塚という遺跡の存在が確認されて以来、1975年より島内の遺跡分布調査が実施され、16ヶ所もの遺跡が存在することが確認された。その後、1976～1980年(I期)、1989～1992年(II期)、2006～2009年(III期)の3度に及び発掘調査が実施された。その成果は、南西諸島の先史時代について多くの情報をもたらし、「島を利用する」という人類の歴史と文化を考える上で極めて重要な示唆を与えた。

私は幸運にもIII期目の発掘調査に関わった。無人島での発掘など初めてである。発掘調査の準備、調査員・作業員の確保・管理は通常の発掘調査とは異なる困難さがともなった。拠点は具志川島の北に位置する伊是名島に定め、漁船をチャーターして毎日通う生活である。具志川島と伊是名島間の海流は速く、これを横断する時には多量の水飛沫が船上

に飛び散り、朝からびしょ濡れで島に上陸する日々も多かった。カメラや測量器具などの精密機器は、濡れないようにいつもビニールで厳重にくるんでいた。気を使うことが多い。4年にわたる発掘調査の日々で常に私の脳裏を占めたのは、「南島人達は何故このような小さな島を利用したのか?」という疑問であった。実は、具志川島の北と南には泳いで渡れそうな距離に伊是名島と伊平屋島という、より大きな島が存在し、南東洋上には沖縄最大の島、沖縄本島を望むことができる。南島人にとっては、より大きく資源豊富な島を利用すればよく、周囲4.2kmほどしかない具志川島など不必要だと感じる。しかし実際には、盛衰はあるが多くの時代にわたって島が利用されている。

これまでの発掘調査・研究によって、最も多くの情報が回収されているのは縄文時代中・後期である。中期～後期前半には岩陰砂丘を生活の場としており、炉跡や小規模な貝塚が残されている。長期的な定住ではなかったようで、文化層が無遺物層の間層を挟みながら幾重にも堆積している。その期間は500～800年ほどだろうか。この間、砂丘はどんどん厚く堆積し、岩陰には人が生活するための十分な隙間がなくなってきた。そのためか、この岩陰は縄文後期には墓として利用される。南西諸島では遺体を地下に埋めず、岩陰や洞穴を利用して露出した環境に葬る崖葬墓(風葬)が多く確認される。具志川島では4ヶ所もの岩陰で崖葬墓が確認されており、最少個体数で100体を超える縄文人骨が回収



具志川島



岩立遺跡西区(縄文中・後期包含層)

されている。この時期はそれまでと異なり、長期的な定住が行われていたようだ。その後も、島は利用の盛衰や断絶がおこりながらも、近世・近代まで断続的な利用が行われる。現在は無人島となっているが、いずれ再び人類によって利用される日も来るのかもしれない。具志川島という小さな島、

この島が何故人類に利用されたのか、遺跡を徹底的に調査・研究することによって見えてくる島嶼地域の人類史がある。遺跡だけでなく、島全体が人類の歴史と文化が詰まった文化財だと思う。島に関心のある研究者にはぜひ一度訪れていただきたい島である。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは新里亮人さんです。

考古学者の書棚

『常陸国風土記』と説話の研究

志田諄一／雄山閣出版株式会社(1998)

早川 麗司

日立市郷土博物館長の志田諄一先生は、平成23年12月21日に亡くなられた。御冥福をお祈り申し上げます。先生は「教育者」と「研究者」であり続け、平成23年11月に2回目の入院をするまで、執筆活動や博物館の市民向けの講座を行っていました。本を紹介する前に先生自身について、平成24年2月11日の「志田諄一先生お別れの会」で配られたパンフレットに沿って簡単に紹介します。

先生は1929年(昭和4)1月29日生まれ。1954年(昭和29)明治大学文学部地理歴史学卒業、同年に茨城キリスト教学園高等学校教諭、1959年(昭和34)茨城キリスト教短期大学助手兼務、1963年(昭和38)明治大学大学院修士課程修了、1965年(昭和40)茨城キリスト教短期大学講師、1967年(昭和42)茨城キリスト教大学助教授、1969年(昭和44)明治大学大学院博士課程満期退学、1974年(昭和49)茨城キリスト教大学教授、1984年(昭和59)茨城キリスト教大学学長、1997年(平成9)茨城県教育委員会教育委員長、1998年(平成10)史学博士の学位取得、2002年(平成14)茨城キリスト教大学退職、茨城キリスト教大学名誉教授称号授与、2003年(平成15)文部科学大臣表彰、2004年(平成16)日立市郷土博物館の館長就任、2005年(平成17)瑞宝中綬章叙勲。以上が先生の略歴です。

先生は長く茨城キリスト教大学の中心的立場にあり、また、数多くの論文および著作を発表しており、古代史研究の第一人者でした。その他、多くの自治体史編纂も取り組まれ、茨城県初の自治体史である『日立市史』(1959年(昭和34)2月)では、考古資料をもとに市内の歴史を記述されています。また、文化財行政にも大きく貢献しています。例えば、1955年(昭和30)に日立市古墳調査会の調査委員として、市内の古墳、横穴墓を調査しています。その成果は1956年4月に『日立市古墳調査の概要』として、古墳や横穴墓の基礎情報をまとめられています。先生は考古学にも関心をもち、多くの考古学研究者と交流していました。

先生の本の中から明治大学に博士学位請求論文として提出された、『常陸国風土記』と説話の研究を紹介いたします。本の章立ては、以下のとおりです。

序章 風土記研究の視点 第1節 風土記編纂の思想 第2節 蝦夷征討と常陸国

第1章 風土記編纂と地名説話 第1節 風土記と山川原野の地名説話 第2節 風土記と巡幸説話 第3節 風土記と倭武天皇

第2章 『常陸国風土記』の成立と内容 第1節 『常陸国風土記』の成立 第2節 『常陸国』の省略事情 第3節 『常陸国風土記』と常世の国思想 第4節 『常陸国風土記』と神仙思想 第5節 『常陸国風土記』と歌謡 第6節 『常陸国』と自然林 第7節 『常陸国風土記』にみえる駅家

第3章 説話の検討と展開 第1節 油置売命と笠間の村 第2節 新治国と多珂国 第3節 黒坂命の説話 第4節 行方郡家の槻 第5節 麻績王の説話 第6節 行方郡と佐伯の説話 第7節 建借問命の説話 第8節 晡時臥山の神婚説話 第9節 大櫛の岡の説話 第10節 地質に関する説話 第11節 久慈川をめぐる説話 第12節 多珂郡家と高戸

第4章 風土記関連の問題 第1節 那珂郡荒墓郷 第2節 常陸国の関 補論 歌舞音曲と鬼 第3節 風土記と古代人の一生 第4節 蝦夷征討と常陸の娘

付論 風土記の研究史と課題 1 はじめに 2 『常陸国風土記』成立の問題 3 『常陸国風土記』の立郡記事 4 倭武天皇の問題 5 夜刀の神をめぐる問題 6 おわりに 補注 総括 あとがき

古代常陸国の歴史を考えるうえで、『常陸国風土記』の理解は必要である。『常陸国風土記』多珂郡の条に、「藻島駅家」の位置について記載されている。私が平成23年度まで調査担当した「長者山遺跡」は、「藻島駅家」の推定地と考えられている日立市十王町伊師に所在している官衙遺跡である。官道、区画溝跡、掘立柱建物跡、礎石建物跡などを調査した。この遺跡について先生に色々とお話を聞いていたので、先生との別れはとても残念である。

アルカ通信 No.105

発行日 2012年6月1日
 発行人 角張諄一
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp